

誰がネットいじめのうわさを伝播させるのか？ —うわさの伝播理論に基づいて—

横谷 謙次¹⁾・伴 奈々子²⁾・鮎川 順之介³⁾・板倉 憲政⁴⁾・長谷川 啓三⁴⁾

- 1) 新潟青陵大学大学院
- 2) 坂総合クリニック
- 3) 富士通株式会社
- 4) 東北大学教育学研究科

キーワード：ネットいじめ、通常のいじめ、いじめられっ子、うわさ、伝播モデル

Who diffuse rumours originated from cyber bully? — From the perspectives of diffusion model of rumours —

Kenji YOKOTANI¹⁾, Nanako BAN²⁾, Junosuke AYUKAWA³⁾,
Norimasa ITAKURA⁴⁾, Keizo HASEGAWA⁴⁾

- 1) Niigata Seiryō University
- 2) Saka General Clinic
- 3) Fujitsu, Limited
- 4) Tohoku University

Key words : Cyber bully; Traditional bully; victims of bullying; rumours; diffusion models.

I. 問題と目的

1. ネットいじめについての先行研究

いじめは、個人や集団が意図的で攻撃的な活動もしくは行為を被害者に対して繰り返し行い、被害者はその攻撃的な活動から自分の身を独力で守ることが困難である状態、と定義される (Solberg & Olweus, 2003)。近年はパソコンや携帯電話を利用したいじめが行われるようになってきており、ネット上のいじめとして知られている (文部科学省, 2008)。先の定義 (Solberg & Olweus, 2003) を用いれば、ネット上のいじめとは、個人や集団が意図的で攻撃的な活動もしくは行為を被害者に対してパソコンや携帯電話を用いて繰り返し行い、被害者はその攻撃的な活動から自分の身を独力で守ることが困難である状態、と定義し得る。ここでは従来のいじめを通常いじめとし、ネット上のいじめをネットいじめとする。ネットいじめはその被害によって自殺する者が出てきており、深刻化していると言える (Computer Fraud & Security, 2008)。したがっ

て、ネットいじめへの問題解決は広く求められていると言える (文部科学省, 2008)。

通常いじめとネットいじめとが対応する、ということが先行研究から示されている。例えば、Smith et al (2008) は533名のイギリスの小学生・中学生・高校生を対象に質問紙調査を行った。その結果、ネットいじめの被害者は通常いじめでも被害者であり、ネットいじめの加害者は通常いじめでも加害者であることを示した (Smith et al, 2008)。また、Li (2007) は177名のカナダの中学1年生を対象に質問紙調査を行ったところ、ネットいじめの被害者と通常いじめの被害者との間に有意な正の相関を見つけ、ネットいじめの加害者と通常いじめの加害者との間にも有意な正の相関を見つけている。もちろん、ネットいじめの加害者が通常いじめの被害者になる、という研究もあるが (Ybarra et al, 2004, 2004b)、他の多くの研究では支持されていない (Li, 2007; Smith et al, 2008; Raskauskas & Stoltz, 2007)。これらの研究から、ネットいじめの被害者・加害者は通常いじめの被害者・加害者と

対応する、と考えられる。この知見は通常のいじめの被害者・加害者からネットいじめの被害者・加害者を推測することを可能にさせ、ネットいじめの早期発見・対応につながる。したがって、ネットいじめと通常のいじめとの対応を検討することは重要である。

しかし、先行研究では通常のいじめの加害者がネットいじめをどのように広めているのかわかっていない。同様に通常のいじめの被害者がネットいじめにどのように巻き込まれているのかもわかっていない。例えば、「ネットの書き込みを校内で広めているのは誰か？」という問いには先行研究の知見からは答えられない。この問いに答えることは重要である。なぜなら、ネットいじめの伝播のプロセスが分かればそのプロセスに介入することが可能になるからである。ネットいじめが周囲に広まる前に予め介入できれば、ネットいじめの被害は最小限に食い止めることが出来るだろう。そこで本研究では、うわさの伝播理論 (Bordia & Difonzo, 2004; Difonzo, Bordia, Rosnow, 1994; Rosnow & Kimmel, 2000) を基にネットいじめを伝播させる行為を新たに分類する。また、ネットいじめの先行研究とうわさの伝播理論に基づいて、通常のいじめの加害者と被害者がネットいじめをどう伝播させているのかを仮説立て、検証する。

2. うわさの伝播理論とネットいじめ

うわさとは「信憑性のない意見が提案されることであり、その意見はある人々にとって話題性のあることであり、その人々によって流布される」と定義される (Bordia & Difonzo, 2004; Difonzo, Bordia, Rosnow, 1994; Rosnow & Kimmel, 2000)。ニュースは信憑性があるという点でうわさとは区別される。また、ゴシップは信憑性がないという点でうわさと同じであるが、ゴシップとは話題性の点で区別される。うわさは特定の集団にとって重要な問題を示す (例：A銀行は倒産するらしい) のに対し、ゴシップはあまり意味を持たない無駄話である (例：B芸能人に新しい恋人が出来た)。

うわさは不確かさ、話題性、不安、信じやすさによって広がるとされている (Bordia, Difonzo, 2002b; Rosnow, 1991)。例えば、聞き手にとってそのうわさが本当であるかどうかを確認できない場合、うわさは広まりやすい (Allport & Postman, 1965; Shibutani, 1966)。同様に、聞き手にとってそのうわ

さが重要であるほど、うわさは広まりやすい (Kimmel & Keefer, 1991)。また、そのうわさが聞き手を不安にさせるほど、うわさは広まりやすい (Walker & Blaine, 1991)。加えて、そのうわさの結果を聞き手が望んでいるほど、うわさは広まりやすい (Pezzo & Beckstead, 2006)。つまり、うわさの聞き手が事の真相を確認する手段を持たず、その真相が聞き手にとって非常に重要であり、また、不安を書きたて、そして、起こりうるように信じ込まれる場合、うわさは伝播しやすいと言える。

うわさを伝播させる行為にはうわさの「生成」、「受取」、「伝達」の3つがある (Walker & Blaine, 1991)。生成とはうわさを作ることである。受取とは、他人からうわさを聞くことである。伝達とは自ら作ったうわさ、もしくは、他人から聞いたうわさを他人に伝えることである。この行為分類はうわさ研究の実験場面で前提とされている (Bordia, Difonzo, 2002; Walker & Blaine, 1991)。つまり、うわさの伝播には少なくとも生成、受取、伝達の3つの行為が必須であると考えられている。

うわさの生成、受取、伝播は学校の裏サイト (以下裏サイトとする) を使用したネットいじめにも適用し得る。裏サイトとは、特定の個人 (学校の同級生または先輩・後輩) を中傷する内容 (容姿、性格、言動、成績など) や個人情報 (本名、住所、電話番号、メールアドレス、写真など) が本人に無断で書き込まれているインターネット上のサイト (掲示板・ウェブログ・プロフィールサイト・チャットルームなど) を示す (文部科学省 (2008) を参照の上定義した)。裏サイトへの書き込みはうわさの生成に該当する。例えば、「1年1組のA子は援助交際しているらしいよ」と裏サイトに書き込んだ場合、その信憑性のなさ、A子を知っている者にとっての話題性、A子を知っている者による流布されやすさ、という点でうわさの定義があてはまる。また、その書き込みが多くのクラスメイトにとって不確かであり、話題性があり、A子の友人や周囲の不安を掻き立て、一部のクラスメイトが信じ込みたくなるという点でうわさが伝播する条件を満たしている。以下、裏サイトへの書き込みを書き込みと略す。

同様に裏サイトの管理もうわさの生成に該当する。裏サイトの管理とは、裏サイト内の個人情報や個人への中傷を削除せずにサイトを更新する行為である。裏サイトの管理は、裏サイト内の書き込みを

促進しているとも言える。ここから裏サイトの管理は直接的ではないが、間接的にうわさを生成している、と言える。以下、裏サイトの管理を管理と略す。

また、裏サイトを他人から聞くことはうわさの受取に該当する。裏サイトがうわさの源であるため、その裏サイトの存在を他人から聞くことはうわさの受取と考えられる。同様に、裏サイトがうわさの源であるため、その裏サイトの存在を他人に伝えることはうわさの伝達と考えられる。以下、裏サイトの存在を聞くこと、及び、伝えることをそれぞれ受取、伝達と略す。

ここから裏サイトの伝播には、書き込み、管理、受取、伝達に関与していると言える。ではこういった裏サイトの伝播行為を通常のいじめの被害者と加害者はどのように行っているのだろうか？先行研究では通常のいじめの加害者はネットいじめの加害者と対応するということが指摘されている (Li, 2007; Smith et al, 2008; Raskauskas & Stoltz, 2007)。また、他人を中傷するうわさを生成することは加害行為の一種とも考えられている (Crick & Grotpeter, 1995; Merten, 1997; Xie et al, 2002)。したがって、通常のいじめの加害者は、ネットいじめの加害行為の一つとして裏サイトのうわさの生成に関与していると考えられる。つまり、通常のいじめの加害者は、裏サイトの書き込みと管理を行っていると考えられる。

(1) 仮説A. 通常のいじめの加害者は、通常のいじめの被害者や非加害者・非被害者よりも多く書き込むだろう。

(2) 仮説B. 通常のいじめの加害者は、通常のいじめの被害者や非加害者・非被害者よりも多く管理を行うだろう。

また、先行研究では通常のいじめの被害者がネットいじめの被害者と対応するということが指摘されている (Li, 2007; Smith et al, 2008; Raskauskas & Stoltz, 2007)。ここから、通常のいじめの被害者は自分についてのうわさが発生していると考えられる。つまり、通常のいじめの被害者のことが裏サイトに書き込まれていると考えられる。

(3) 仮説C. 通常のいじめの被害者は、通常のいじめの加害者や非加害者・非被害者よりも多く書き込まれているだろう。

加えて、うわさの研究ではうわさの内容で不安を喚起された者はその内容をより他人に伝達しやすい

ということが指摘されている (Walker & Blaine, 1991)。Walker & Blaine (1991) は354名の大学生を対象に調査し、不安を喚起する (制御不可能な未来で否定的な結末を示す) うわさのほうが、そうでないうわさよりも広まりやすいことを示した。したがって、うわさによって不安に陥った場合、その不安を和らげるために、他人にうわさの内容を伝えようとすることも報告されている (Bordia, Difonzo, 2002b; Rosnow, 1991)。

裏サイトに自分の個人情報や自分を中傷する内容を書かれた者はそうでない者よりも不安になりやすい。また、裏サイトには通常のいじめの被害者が書き込まれやすい (仮説C)。したがって、通常のいじめの被害者は裏サイトに書き込まれて不安になりやすいために、その内容を他人に伝達すると思われる。

(4) 仮説D. 通常のいじめの被害者 (裏サイトに書き込まれている者) は通常のいじめの加害者や非加害者・被害者よりも多く裏サイトを伝達するだろう。

また、うわさを書かれた被害者はだれがそのうわさを書いたのか分からないことが報告されている (Crick & Grotpeter, 1995; Kowalski & Limber, 2007; Merten, 1997; Xie et al, 2002)。例えば、Xie et al (2002) は475名の中学1年生を対象に調査した結果、自分を中傷するうわさが流された者のうち約9%が誰によってそのうわさが作られたかわからないことを示した。ここから、うわさを流される被害者はうわさを流す加害者についての情報を知らないといえる。換言すれば、うわさを流す加害者は被害者に加害者についての情報を伝えないと言える。裏サイトの存在を伝えることは、うわさの発生源と加害者とを知らせることになる (裏サイトの書き込みにはIPアドレスが対応しており、IPアドレスは書き込み者を特定しうる)。したがって、うわさを作られている者は裏サイトについて伝えられることが少ないだろう。また、裏サイトには通常のいじめの被害者が書き込まれやすい (仮説C)。ここから、通常のいじめの被害者は裏サイトについてあまり知らされないと考えられる。

(5) 仮説E. 通常のいじめの被害者 (裏サイトに書き込まれている者) は通常のいじめの加害者や非加害者・非被害者よりも少なく裏サイトを受け取るだろう。

II. 方法

1. 対象者

東北のA大学60名、B大学208名、関東のC大学52名の大学生計321名である。平均年齢（SD）は19.7（1.3）才であり、男性201名、女性113名、その他もしくは無記名が7名である。タイ人が1名、韓国人が1名いるが、それ以外は全て日本人である。

2. 実施手順

本研究はA大学の1名の教員と広島D大学の1名の教員から倫理的に問題がないことが確認されている。質問紙は2009年11月から2010年の1月にかけて配布された。配布手順は以下のとおりである。まず、質問紙の内容を授業の担当教員に見せて、内容に問題がないことを確認した。次に、A大学の事務補佐に再度その内容を見せ、その内容に問題がないこと、および、実施に際して担当教員とその学生に損害を与えないことを確認した。そのうえで、質問紙を配布した。質問紙の配布は授業の休み時間、授業の始まり、もしくは終わりに行われた。配布する際は、調査の目的を述べ、調査への参加が任意であり、質問紙の回答が匿名であることを述べた。調査の目的に賛同したものが質問紙に回答した。回答し終わった質問紙は直接担当教員が回収するか、もしくは、第一著者から第四著者のいずれかが回収した。

3. 質問紙

(1) 通常がいじめ

通常がいじめの行為の定義はSolberg et al (2003) に倣った。つまり、以下のような文を質問の前に挿入した。

高校時代のあなたについてお伺いします。

「一人もしくは複数の学生がある学生に以下の項目のようなことをしていた場合、その学生はいじめられていると言えます。

- ある学生に意地悪で傷つけるようなことを言っていたり、からかっていたり、意地悪で傷つけるようなあだ名で呼んでいる場合
- ある学生を意図的に無視したり、グループから除外したり、何かするときのけものにしたっている場合
- ある学生を叩いたり、蹴ったり、押したり、こき使ったり、脅したりしている場合
- ある学生についての嘘をついたり、デマを流した

り、意地悪なメモを他の学生らに渡して、ある学生が嫌われるように仕向けている場合

- 上に似たような傷つけることをしていた場合

上記のことはしばしば行われます。また、いじめられている本人が自分自身をいじめから守るのは難しいです。また、ある学生が意地悪く傷つけるように繰り返しからかわれている場合も、いじめられていると言います。

けれども、このからかいが親しみを込めて、冗談っぽく行われている場合には、いじめとは言いません。また、同じ程度の強さや権力を持った二人の学生が言い争ったり、ケンカをしていたりする場合もいじめとは言いません。」

この文の後に「①. どのくらいの頻度で、学校でいじめていたことがありましたか。」と聞き、1いじめたことがない、21回から2回、3月に2回から3回、4一週間に1回、5一週間に数回以上、の選択肢を用いた。次に「②. ①のような学校でのいじめをどれくらい続けましたか。」と尋ね、1したことがない、2一週間未満、3一か月ほど、4一学期間ほど、5一年間ほど、6数年ほど、のいずれかの選択肢を用いた。同様にいじめられたことについても「①. どのくらいの頻度で、学校でいじめられたことがありましたか」「②. ①のような学校でのいじめはどれくらい続けましたか。」と尋ね、同様の選択肢を用いた。

いじめる頻度といじめる期間は有意な正の相関を持ち、その相関は強かった ($\chi^2 = 514, p < .01$, ピアソンの $r = 0.79, p < .001$)。同様に、いじめられる頻度といじめられる期間も有意な正の相関を持ち、その相関も強かった ($\chi^2 = 537, p < .01$, ピアソンの $r = .86, p < .01$)。ここからいじめの頻度と期間は強い正の相関を持つことが示された。

本研究では先行研究 (Solberg et al, 2003) に倣い、いじめる期間が「3一か月ほど」以上を選んだ者をいじめっ子 (通常がいじめの加害者) とした。同様にいじめられる期間が3以上を選んだ者をいじめられっ子 (通常がいじめの被害者) とした。また、いじめっ子でもいじめられっ子でもない者を非関与者と定義した。その結果、いじめっ子は9名、いじめられっ子は16名、非関与者は286名となった。これらの3つの群をそれぞれいじめっ子群、いじめられっ子群、非関与者群とした。2名はいじめっ子でもあり、いじめられっ子でもあったが、この2名については群として扱うにはn数が小さすぎるため、

分析から除いた。また、いじめについて回答しなかった7名についても分析からあらかじめ除いた。

(2) ネットいじめ

管理：「掲示板・ブログ・プロフ・チャットルームなどのいずれかを管理したことがあった。特定の個人（学校の同級生または先輩・後輩）を中傷する内容（容姿、性格、言動、成績など）や個人情報（本名、住所、電話番号、メールアドレス、写真など）を削除しなかった（本人に無断で放置した）ことがあった。個人の中傷や個人の情報を削除せずに、更新したことがあった。」と質問し、「②. ①のような行為をどれくらい続けましたか。」と質問し、1したことがない、2一週間未満、3一か月ほど、4一学期間ほど、5一年間ほど、6数年ほど、の選択肢を用いた。それぞれの選択肢を選んだ場合、管理した日数として、0、7、30、90、365、1095日と換算した。管理の平均日数は4.8 (S.D. = 40.8) 日であった。

書き込み：「<掲示板・ブログ・プロフについて>①. 特定の個人（学校の同級生または先輩・後輩）を誹謗・中傷する内容（容姿、性格、言動、成績など）、もしくは本人に無断で本人の個人情報（本名、住所、電話番号、メールアドレス、写真など）を書き込んだことがあった。」と質問し、「②. ①のような書き込みをどれくらい続けましたか。」と質問し、1したことがない、2一週間未満、3一か月ほど、4一学期間ほど、5一年間ほど、6数年ほど、の選択肢を用いた。書き込んだ平均日数は1.7 (S.D. = 21.5) 日であった。

書き込まれ：「<掲示板・ブログ・プロフについて>①. 自分を誹謗・中傷する内容（容姿、性格、言動、成績など）、もしくは自分に無断で自分の個人情報(本名、住所、電話番号、メールアドレス、写真など)を書き込まれたことがあった。」と質問し、「②. ①のような書き込みはどれくらい続きましたか。」と質問し、書き込みと同様の期間の選択肢を用いて、日数を換算した。書き込まれた平均日数は5.3 (S.D. = 64.6) 日であった。

受取：「自分の高校の裏サイトの存在を誰かからそれとなく伝えられたことがあった。」と質問し、「②. ①のような書き込みをどれくらい続けましたか。」と質問し、書き込みと同様の期間の選択肢を用いて、日数を換算した。受取の平均日数は12.7 (S.D. = 54.6) 日であった。

伝達：「自分の高校の裏サイトの存在を誰かにそ

れとなく伝えたことがあった。裏サイトとは「学校の同級生または先輩・後輩を中傷する内容（容姿、性格、言動、成績など）もしくは、その人に対する個人情報（本名、住所、電話番号、メールアドレス、写真など）が無断で掲載されているサイト」と質問し、「②. ①のような書き込みをどれくらい続けましたか。」と質問し、書き込みと同様の期間の選択肢を用いて、日数を換算した。平均日数は0.5 (S.D. = 5.4) 日であった。

4. 統計手法

通常いじめとネットいじめの諸変数との関連を調べるために、年齢と性別を制御変数にして偏相関係数を求めた。次にネットいじめの諸変数を従属変数にし、通常いじめの諸変数を独立変数にして重回帰分析を行った。独立変数が2個しかないため（いじめる、いじめられる）、強制投入法を用いた。なお、偏相関と重回帰を求める際は、いくつかの変数の欠損値のためにn数が若干異なる。

仮説の検定では3群間を比較する際にクラスカルウォリスの検定を用いた。いじめっ子群といじめられっ子群はそれぞれ9名、16名であり、従属変数の正規性を保証しえない。また、従属変数は等分散性を仮定しえない。この二つの理由からノンパラメトリック検定としてクラスカルウォリスの検定を用いた。

Ⅲ. 結果

1. 通常いじめとネットいじめの偏相関関係

仮説検定の前に、通常いじめの諸変数とネットいじめの諸変数との偏相関を調べた（以下Table 1 参照）。いじめる体験は管理する行為、及び、受取行為と有意な正の相関を示していた。一方、いじめられる体験は書き込まれる行為と有意な正の相関を示していた。ここから、いじめる体験が多ければ多いほど、裏サイトを管理しやすく、裏サイトに関する情報をより得やすいことが示唆される。一方、いじめられる体験が多ければ多いほど、裏サイトに自分のことが書かれやすい、ということが指摘しうる。

また、管理する行為は他のネットいじめの伝播行為と有意な相関を示さない一方、書き込む、書き込まれる、受取、伝達のほとんど（5/6）が有意な正の相関を示している。ここから、ネットいじめの管理行為は、他の伝播行為と関連しにくい一方、他の

Table 1 通常のいじめとネットいじめとの偏相関 (性別と年齢を制御)

		2	3	4	5	6	7
通常の いじめ	1.いじめ	.09	.16*	.09	.12*	.20**	.05
	2.いじめられる		.00	-.01	.24**	.01	.02
ネット いじめ	3.管理する			.18**	.05	-.00	.07
	4.書き込む				.24**	.07	.29**
	5.書き込まれる					.21**	.13*
	6.うわさの受取						.37**
	7.うわさの伝達						

N = 288

** : p < .01, * : p < .05,

Table 2 ネットいじめの伝播行為と通常のいじめのいじめられる—いじめられる体験

	管理 n = 309	書き込み n = 308	書き込まれ n = 309	うわさの受取 n = 309	うわさの伝達 n = 311
いじめ	.04*	.08	.09†	.09***	.04
いじめられる	-.02	-.00	.23***	-.00	.01
調整済みR2	.01*	.00	.06***	.03**	.00

*** : p < .001, ** : p < .01, * : p < .05, † : p < .10

Table 3 いじめっ子といじめられっ子が行うネットいじめの伝播行為

	いじめられっ子 n = 16 平均日数 (S.D)	いじめっ子 n = 9 平均日数 (S.D)	いじめ非関与者 n = 286 平均日数 (S.D)	χ^2
管理	0.4 (1.7)	40.5 (121.6)	4.1 (37.5) ^a	4.6†
書き込み	0 (0)	10.0 (30.0)	1.6 (22.1) ^b	3.6
書き込まれ	72.6 (272.8)	13.3 (30.4)	1.5 (21.6) ^a	20.6***
うわさの受取	3.1 (7.6)	13.8 (28.7)	13.6 (57.5) ^a	10.2**
うわさの伝達	1.8 (7.5)	0.7 (2.3)	0.5 (5.4)	2.0

*** : p < .001, ** : p < .01, * : p < .05, † : p < .10, ^a : n = 284, ^b : n = 283.

うわさの伝播行為 (書き込む、書き込まれる、受取、伝達) は相互に関連していることが示唆される。

2. 通常のいじめが示すネットいじめの行動

次にネットいじめの諸変数を従属変数にし、通常のいじめの諸変数を独立変数にし、強制投入法による重回帰分析を行った (以下Table 2 参照)。いじめる体験は管理行為に対して有意な正の偏回帰係数を示した。また、いじめられる体験は書き込まれる行為に対して有意な正の偏回帰係数を示した。加えて、いじめる体験は受取行為に対して有意な正の偏回帰係数を示した。ここから、いじめる体験の多さは、裏サイトの管理行為や裏サイトの受取の多さを

予測する、と言える。一方、いじめられる体験の多さは、裏サイトに書き込まれることを予測する、とも言える。ただし、説明率が低いため注意が解釈には必要である。

3. 仮説検定

いじめっ子群といじめられっ子群といじめ非関与群を独立変数にして、管理、書き込み、書き込まれ、受取、伝達をそれぞれ従属変数にしてクラスカル・ウォリスの検定を行った (以下Table 3 参照)。

いじめっ子群は、いじめられっ子群やいじめ非関与群よりも有意な傾向で多くの管理を行っていた。一方、書き込みに関しては有意な差は見られなかった。ここから、いじめっ子は裏サイトの管理をしや

すい傾向があるといえる。一方、書き込みについては通常のいじめに関与しない者もおこなっているといえる。

また、いじめられっ子群は、いじめっ子群やいじめ非関与群よりも有意に多く書き込まれていた。また、いじめられっ子群は、いじめっ子群やいじめ非関与群よりも受取の数が有意に少なかった。ただし、伝達に関しては有意な差は見られなかった。ここから、いじめられっ子は裏サイトに書き込まれやすい一方、裏サイトについての情報を受け取りにくいということが示された。

IV. 考察

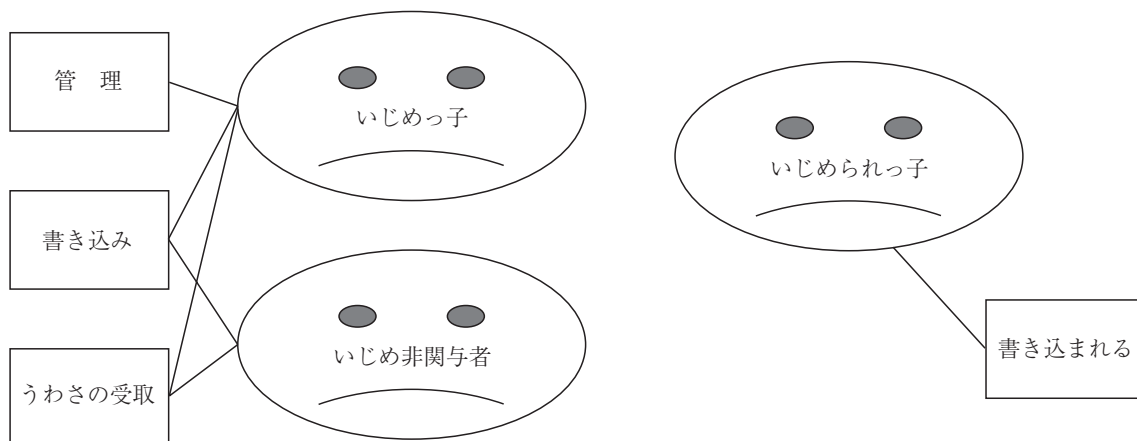
本研究は裏サイトのネットいじめをうわさの伝播 (Bordia & Difonzo, 2004; Difonzo, Bordia, Rosnow, 1994; Rosnow & Kimmel, 2000) という視点からとらえなおした初めての研究である。仮説Bを支持するように、いじめる体験と裏サイトを管理する行為は有意な正の相関を持ち、いじめっ子はより管理することが多かった。また、通常いじめとネットいじめの被害者が共通するという研究 (Li, 2007; Smith et al, 2008; Raskauskas & Stoltz, 2007) を支持するように、いじめられる体験と裏サイトで書き込まれる体験は有意な正の相関を持ち、いじめられっ子はより多く書き込まれやすかった。この結果は仮説Cを支持する。また、うわさの作成者の匿名性 (Merten, 1997; Xie et al, 2002) を支持するように、いじめられっ子はネットいじめの存在について伝えられることが少なかった。これは仮

説Eと対応する。

一方、通常いじめとネットいじめの加害者が共通するという研究 (Li, 2007; Smith et al, 2008; Raskauskas & Stoltz, 2007) は部分的に支持されなかった。つまり、裏サイトの管理についてはいじめっ子がより行い易かったが、書き込みについてはいじめっ子だけでなくいじめ非関与者も行っていった。ここから、通常いじめを傍観している者も書き込みといううわさの生成に関与することが示唆された。今後は傍観者にも視点を当てる必要がある。また、うわさを書きこまれた被害者は不安になって、より多くの人にうわさの内容を伝えるという研究 (Walker & Blaine, 1991) は支持されなかった。本研究では伝える行為をほとんどのものが行わなかった (306名は全く伝えず、残りの15名も一週間未満しか伝えなかった)。そのため有意差を示すほどのデータが得られなかったといえる。今後は裏サイトの伝達の定義を変えて、再度調査すべきだろう。例えば、本研究のように「裏サイトの存在をそれとなく伝える」を伝達として定義するのではなく、「裏サイトの内容を話した」を定義にした場合、異なる結果が得られるだろう。

本研究の結果をうわさの伝播理論 (Bordia & Difonzo, 2004; Difonzo, Bordia, Rosnow, 1994; Rosnow & Kimmel, 2000) に基づいてモデル化するとFig1のようになる。まず、いじめられっ子についてのうわさがいじめっ子を中心に生成される。生成のされ方は裏サイトの管理という行為であったり、書き込みという行為であったりする。書き込みについてはいじめ非関与者も参加する。一旦うわさが生

Fig 1 通常いじめっ子といじめられっ子といじめ非関与者が行うネットいじめの伝播



成されるといじめっ子グループを中心に書き込んだ内容が伝達・共有される。グループ内で共有される場合も、書き込まれているいじめられっ子本人には極力伝えられないようにされる。その結果、いじめられっ子についてのうわさが、いじめられっ子を含まないグループで活発になっていく。もちろん、本研究は横断的研究であるため、モデルのようなプロセスは検証していない。今後は裏サイトの内容を分析することでこのプロセスを検証しうるだろう。その際もうわさの伝播理論は援用しうるだろう (e.g., Bordia & Difonzo, 2004)。

また、本研究の結果を関係的攻撃の理論からとらえなおすことも可能である。関係的攻撃とは、「意図的に友人関係を操作し、傷つけることによって他人を阻害する」行為である (Crick & Grotpeter, 1995)。例えば、ある子どもを仲間外れにしたり、その子どもを傷つけるために友人関係を意図的にさけたり、形成したり、もしくは、友人がその子どもを嫌うようなうわさを流したりすることとされる (Crick & Grotpeter, 1995)。関係的攻撃を行う者はグループの中で人気 (popularity) があり、その人気を維持し、人気を更に得るために関係的攻撃を行うと考えられている (Merten, 1997; Xie et al, 2002)。人気を得るために日々グループ間およびグループ内で人気競争があることも指摘されている (Merten, 1997)。

裏サイトを学校内での人気競争の場所としてとらえ直した場合、本研究の結果は以下のように解釈される。いじめられっ子に関係的攻撃をすることにより、攻撃者はいじめっ子のグループに所属しようとする。いじめっ子グループのメンバーはいじめっ子を蹴落としてより高い人気を得ようとする。そのため、いじめっ子も攻撃される。その結果、いじめられっ子のみでなく、いじめられっ子にも書き込みが集中すると考えられる。加えて、人気競争はいじめっ子グループを中心に行われるため (Merten, 1997)、いじめっ子を中心にしてネットいじめのうわさがやりとりされるとも考えられる。その結果ネットいじめはいじめっ子を中心としたグループに伝播されると言える。

本研究の対象者が大学生であり、過去想起の形式で高校時代のネットいじめを聞いている点は限界といえる。今後は中学生を対象に現在のネットいじめの状況を聞き取っていく必要がある。一方、本研究は先行研究 (Li, 2007; Smith et al, 2008; Raskauskas

& Stoltz, 2007) が示した通常のいじめとネットいじめの対応関係をうわさの伝播理論 (Bordia & Difonzo, 2004; Difonzo, Bordia, Rosnow, 1994; Rosnow & Kimmel, 2000) や関係的攻撃理論 (Crick & Grotpeter, 1995; Merten, 1997; Xie et al, 2002) に基づいてとらえなおした点に価値がある。特にうわさの伝播理論に基づいて、ネットいじめの行為を拡大したことに価値がある (管理、書き込み、受取、伝達、など)。これらの拡張された行為を用いて、ネットいじめを学校内のうわさの伝播プロセスとして捉えなおすことが可能になる。本研究は横断的であるため、プロセスの因果関係を検証することは出来ない。今後は裏サイト上の書き込みを直接分析することによって、因果関係を検討することが可能になるだろう。こういった研究の蓄積によって、ネットいじめへの対応がより迅速になり、ネットいじめが生む悲劇 (Computer Fraud & Security, 2008; 文部科学省, 2008) を事前に予防することができるようになるだろう。

V. 謝辞

研究に協力していただいた茨城キリスト教大学、山形大学、東北大学の教育学部、理学部、工学部の学生様に心より感謝御礼申し上げます。また、質問紙配布を承諾していただいた三澤文紀先生、佐藤宏平先生、目黒恒夫先生、末包文彦先生、関内隆先生にも心より御礼申し上げます。加えて、研究グループで貴重な意見をいただいた長谷川研究室の保護者対応チームとデートDV対策班にも御礼もうしあげます。

VI. 引用文献

- Allport, G.W. & Postman, L. J. (1965) The psychology of rumor. New York : Russell & Russell.
- Bordia, P. & DiFonzo, N. (2002) Rumors and stable-cause attribution in prediction and behavior. Organizational Behavior and Human Decision Processes, 88, 785-800.
- Bordia, P. & DiFonzo, N. (2002b) When social psychology became less social : Prasad and the history of rumor research. Asian Journal of Social Psychology, 5, 1, 49-61.
- Bordia, P. & Difonzo, N. (2004) Problem Solving in

- Social Interactions on the Internet : Rumor As Social Cognition. Social Psychology Quarterly, 67, 1, 33-49.
- Computer Fraud & Security. (2008) Woman accused of bullying teen on Myspace, Computer Fraud & Security, June 1, ISBN1361-3723.
- Crick, N. R. & Grotpeter, J. K. (1995) Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. Child Development, 66, 3, 710-722.
- DiFonzo, N. & Bordia, P. (2002) Rumors and stable-cause attribution in prediction and behavior. Organizational Behavior and Human Decision Processes, 88, 2, 785-800.
- DiFonzo, N. Bordia, P. & Rosnow, R. L. (1994) Reining in rumors. Organizational Dynamics, 23, 1, 47-62.
- Kimmel, A. J. & Keefer, R. (1991) Psychological Correlates of the Transmission and Acceptance of Rumors About AIDS. Journal of Applied Social Psychology, 21, 19, 1608 - 1628.
- Kowalski, R. & Limber, S. (2007) Electronic Bullying Among Middle School Students. Journal of Adolescent Health, 41, 6, S22-S30.
- Li, Q. (2007) New bottle but old wine : A research of cyberbullying in schools. Computers in Human Behavior, 23, 4, 1777-1791.
- Marten, D. E. (1997) The meaning of meanness: Popularity, competition and conflict among junior high school girls. Sociology of Education, 70, 3, 175-191.
- 文部科学省 (2008) 「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集 (学校・教員向け) 平成20年11月. <http://www.next.go.jp/bmenu/houdou/20/11/0811701/001.pdf>
- Pezzo, M. V. & Beckstead, J. W. (2006) A Multilevel Analysis of Rumor Transmission : Effects of Anxiety and Belief in Two Field Experiments. Basic and Applied Social Psychology, 28, 1, 91 - 100.
- Raskauskas, J. & Stoltz A. D. (2007) Involvement in traditional and electronic bullying among adolescents. Developmental Psychology, 43, 3, 564-575.
- Rosnow, R. L. & Kimmel, A. J. (2000) Rumor. In A. E. Kazdin (Ed.) , Encyclopedia of Psychology (Vol. 7, pp. 122-123) . New York: Oxford University Press & American Psychological Association.
- Rosnow, R. L. (1991) Inside rumor : A personal journey. American Psychologist, 46, 5, 484-496.
- Shibutani, T. (1966) Improvised news : a sociological study of rumor, An advanced study in sociology. Indianapolis : Bobbs-Merrill.
- Smith, P. K. Mahdavi, J. Carvalho, M. Fisher, S. Russell, S. & Tippett, N. (2008) Cyberbullying: its nature and impact in secondary school pupils. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 49, 4, 376-385.
- Solberg, M. E. & Olweus, D. (2003) Prevalence estimation of school bullying with the Olweus Bully/Victim Questionnaire. Aggressive behavior, 29, 239-268.
- Walker, C. J. & Blaine, B. (1991) The Virulence of Dread Rumors: A Field Experiment. Language and Communication, 11, 4, 291-297.
- Xie, H. Swift, D. J. Cairns, B. D. & Cairns, R. B. (2002) Aggressive Behaviors in Social Interaction and Developmental Adaptation : A Narrative Analysis of Interpersonal Conflicts During Early Adolescence. Social Development, 11, 2, 205-224.
- Ybarra, M. L. & Mitchell, K. J. (2004) Online aggressor/targets, aggressors, and targets : a comparison of associated youth characteristics. "Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines" Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines, 45, 1308-1316.
- Ybarra, M. L. & Mitchell, K. J. (2004b) Youth engaging in online harassment : associations with caregiver-child relationships, Internet use, and personal characteristics. Journal of Adolescence, 27, 3, 319-336.